膳所焼

滋賀県を代表する焼物としては、たぬきで有名な信楽焼があります。また、彦根藩主井伊直弼による積極的な運営によりすぐれた作品をつくり出した湖東焼、幻の焼物といわれながら雅びな美しさを誇る比良焼、皇室の祝事にかわらけを献納する八田焼なども知られています。

しかし、茶の湯をおこなうものは、だれしも膳所焼の製品をもちたいと思うでしょう。膳所焼は、水指、茶入、茶碗等、茶器がその製品の中心であり、そのシャープなつくりと美しい釉薬は、とても魅力的です。また薄づくりのため、茶入、水指などは、軽くあつかいやすくなっています。ただ茶碗は、その特徴が、茶を点てて飲むとき、手が熱いという欠点になります。

膳所焼が、歴史上に登場するのは、河原正彦氏の研究[1]によると寛永6年（1629）[2]といわれています。

しかし、膳所焼の前身とみられる勢田焼は、元和2年（1616）[3]に歴史上にあらわれています。

奈良[4]の漆商松屋久政・久好・久重三代の茶の湯日記「松屋会記」には、元和8年(1622)、寛永4年（1627)、寛永6年（1629)、寛永7年（1630）の4回勢田焼製品が登場します。

膳所焼の名が定着するのは、寛永年間の後半（17世紀中頃）と思われます。金閣寺の住持鳳林承章和尚の日記「隔蓂記」は、寛永16年（1639）から、寛文4年（1664）まで書き続けられていますが、その中には、膳所焼製品が39回も登場します。

当時、膳所焼では、都の武士、貴族、高僧の注文を受けて、茶入や茶碗などの高級茶陶類をつくっていましたが、鳳林和尚[5]は注文により、禅宗寺院などで用いられる斎茶天目茶碗（大勢の客に茶を振舞う時に用いられる同一規画の量産天目茶碗）なども比較的安価でつくらせています。

膳所焼の窯の場所[6]については、延宝9年（1678）膳所を訪れた土佐尾土窯の陶土、森田久右衛門の旅日記「森田久右衛門江戸日記」の9月30日の条に、膳所藩士荒川新平の案内で「こくほ」と「大江」の二窯を見学に行ったとの記載があります。「こくほ」の焼手は半介であり、「大江」の焼手は、太郎左衛門で、窯の次第、細工、仕事は、京都（京焼）のごとくであったと感想を書いています。また、土については、京都や他の場所から取りよせていることを聞いています。（それより先、9月29日には別の膳所藩士神足武右衛門から、茶入は地元の土でつくり、茶碗は方々の土、二十里以上かなたの土、京都の土も混ぜてつくる。ということを聞いています。）

さらに、荒川新平の話として、(大江の)「太郎左衛門」のぢい（祖父）が焼いた茶入に「がきはら」という名物茶入があることを教えられています。この「がきはら」は神足武右衛門によると、公方様（将軍）が所持しているということだそうです。

延宝9年（1678）に時間軸を立てると、太郎左衛門の「ぢい」が活躍したのは、寛永年間頃（1620年代～1640年代）と考えることができ、膳所焼の前身である勢田焼も「太郎左衛門」のぢいが生産していた可能性があります。

膳所焼の窯は、江戸時代の資料によると、

「大江」「こくほ（国分）」にあったということですが、実際はどうだったのでしょうか。「大江」の窯は、現在大津市瀬田大江町にある窯跡がそれだとされています。

国道１号線と唐橋へ行く県道の分岐点を北へ250mほど行ったところに若松神社があります。神社は低位段丘の先端にあり、段丘から沖積地へ下る斜面を利用して登窯がつくられていました。

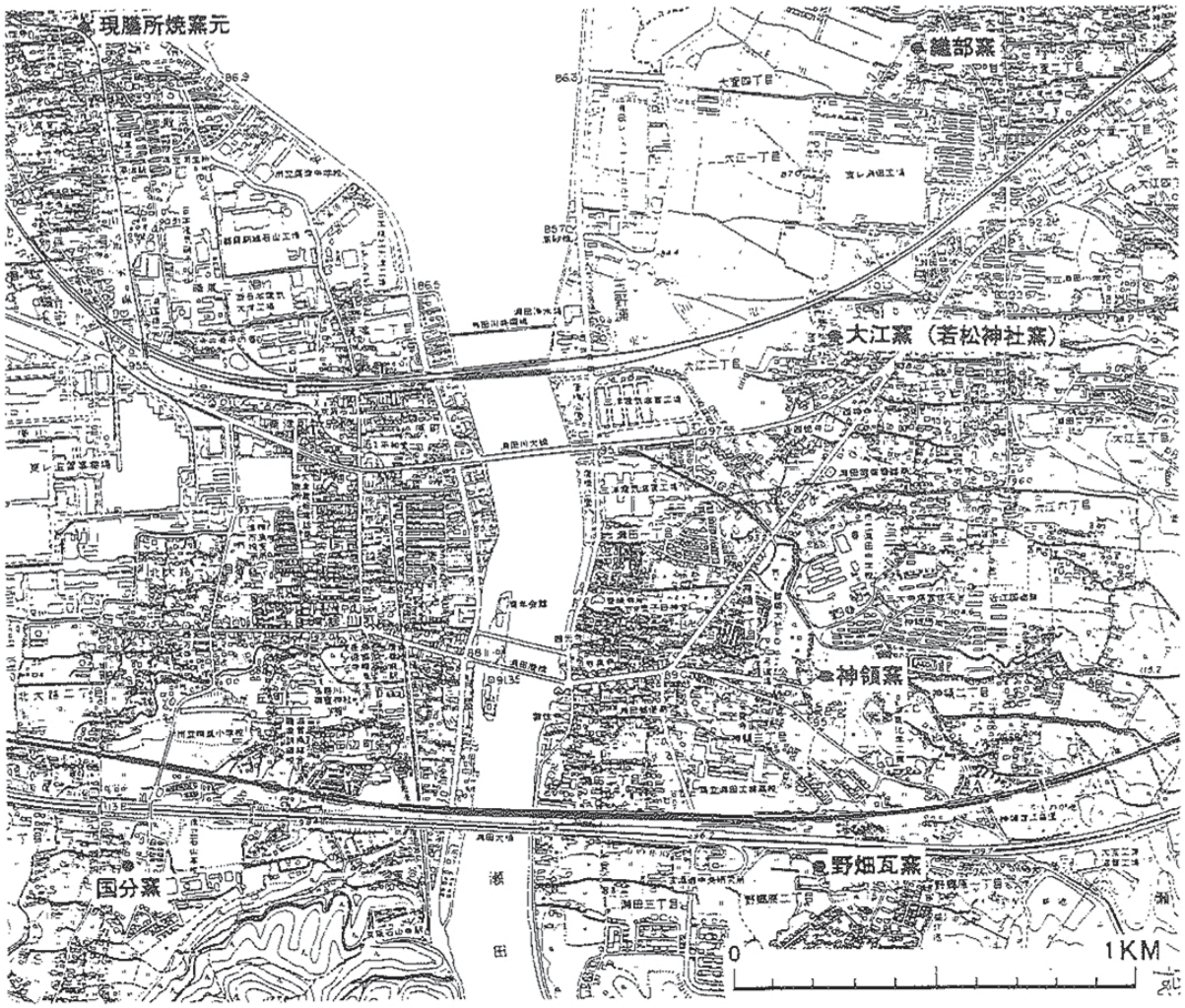
神社の社務所の南裏には稲荷社があり、この南側に登窯の窯尻の一部がみられ、周辺には、サヤ鉢、ツクなどの窯道具が散乱しています。

地元の郷土史研究家内田彦衛氏によると太平洋戦争前には、窯の残骸の全体が残っており、30m近い大きな登窯だったそうです。

しかし、近年、市道の改修工事の際、窯跡のある斜面も削り取られてしまい、窯の規模がまったく分からなくなってしまいました。また、工事中に多くの窯道具が出土したらしいのですが、だれが保管しているのか、現在でも分かっていません。

ところで、郷土史研究家の内田氏の先祖は代々若松神社の神主を務めていましたので、内田家には、神社の資産等を記した明細帳があります。その中に、「貞享５年（1688）若松神社の境内の内一畝二十一歩を壺焼惣左衛門の屋敷として割譲し、神社は藩から七社山中に替地をもらった」という記事があります。

内田氏は、壺焼惣左衛門は窯を築くために神社から土地を割譲してもらい、この時に築いた窯こそ、若松神社の境内に戦前まで残っ



第１図　膳所焼諸窯位置図

ていた窯だと考えておられます。

そうなると、延宝９年(1678)、森田久右衛門が大江を訪れた際、この若松神社の大江窯は、まだ築かれておらず、森田久右衛門は、どこか別の場所にあった「大江窯」[7]を訪ねていたことになります。

そして、太郎左衛門の「ぢい」が名品を生産した勢田窯は、どこにあったのでしょうか。

大江窯については、多くのなぞが残っていますが、それらを解く手がかりとなるはずであった若松神社の窯が、発掘調査もなされずに破壊されてしまったことは、たいへん残念なことです。

「こくほ（国分）」の窯跡も現在は見ることができません。この窯は、大津市国分一丁目にありました。県立石山高等学校の西側に浅い谷があります。現在、谷はせき止められて、小さな貯水池が造られていますが、この谷の西側斜面を利用して登り窯が築かれていたようです。

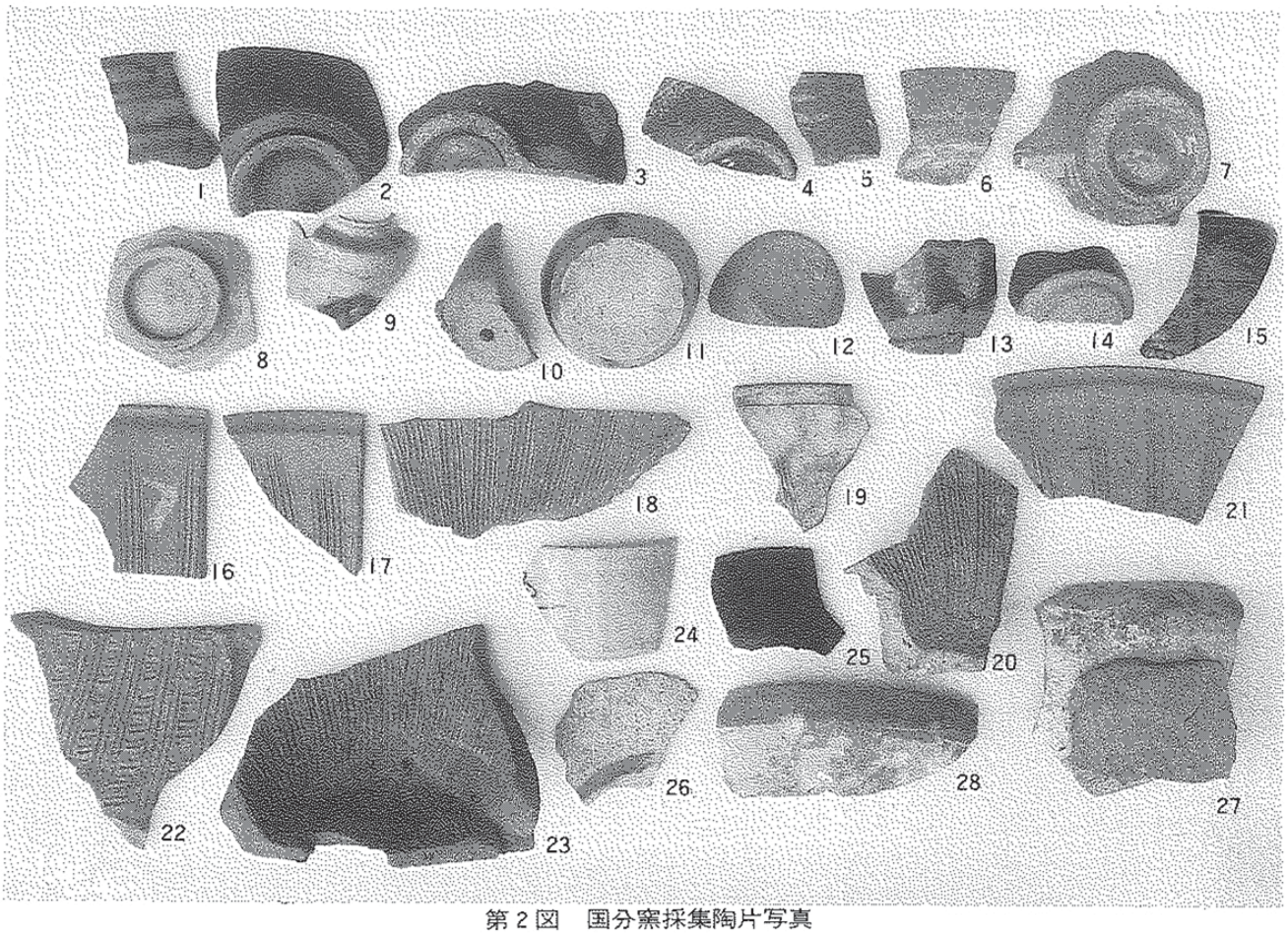
地元在住の郷土史研究家によると、10年前頃までは、陶片や窯道具の散乱している物原があったのですが、住宅造成により、貯水池の一部を埋めたてた際に、物原も一緒に埋められてしまったそうです。

「国分窯」の物原出土遺物は、その表面採集品が、コンテナ２箱ほど、滋賀県埋蔵文化財センターに保管されており、「大江窯」に比べてまだましです。しかし、近江の国を代表する雅陶であり、江戸時代の文献にも度々登場する膳所焼の窯跡が「こくほ」「大江」とも、実体がわからないというのは、残念なことであります。

第２図は国分窯の表面採集資料の写真ですが、この陶片資料について一点ずつ、簡単な説明をしておきたいと思います。

第２図－１は、鉄釉の半筒茶碗で、口縁端部に灰釉を重ねがけしています。伝世品の膳所焼茶碗によくあるタイプです。

２～４は、鉄釉の碗で口縁の拡いタイプで



第２図　国分窯採集陶片写真

す。２、３は口縁端部に灰釉を重ねがけしています。

５、６、７は灰釉の平茶碗で、釉色は薄緑色、伝世品の膳所焼にはないタイプです。

８は、白釉の鉢で、見込みにハリピン（陶器を重ねて焼く時に使う窯道具）の跡が３箇所あります。

９～15は、茶入です。９は、鉄釉を肩と体部に部分的に流しがけをして、その部分をさけて灰釉をかける、というたいへん手のこんだ技法が用いて作られていて、伝世品にはないタイプです。

10～15は、鉄釉のみが、かけられている茶入です。釉色は、茶色で光沢があり、伝世品の膳所焼の釉薬とよく似ていますが、14は、珍しい高台付の茶入、15は大型の茶入です。茶碗、茶入の土は、たいへん細かい土で、硬く焼いてしまっており、うすい橙色をしています。茶碗の土と茶入の土の違いは、ほとんどありません。

16～23は、擂鉢です。茶陶を生産する膳所焼の窯で日常品の擂鉢が出土するのは、意外な気もしますが、登窯の特性から言うと擂鉢などを焼かざるを得ないのです。

登窯は、陶磁器を焼く部屋が何室かつながってでき上っていますが、火のまわりが特によく、良い製品が焼けるのは窯の中心付近の一室が二室のみなのです。しかしながら、上と下の部屋をからっぽにして、中心部の部屋だけ陶器をつめても、良く焼き上がらないのです。上から下まで陶磁器をぎっしりつめて、はじめて全体によく火が回り、特に中心部の部屋は温度が安定し、よい製品が焼けます。

そのため、高級品を焼く窯でも、高級品は窯の中心付近の部屋に入れ、他の部屋には、少々仕上がりが悪くても売れる日常品をつめて焼くことが一般的におこなわれています。

国分窯においても、以上のような窯づめ法が取られたと思われます。

擂鉢以外の日常品として、24は向付か猪口と思われる筒形の陶器で、鉄絵で文様を描き白濁釉をかけて焼成しています。

25は鉄釉の蓋です。この釉は黒色で伝世品の膳所焼によくある色です。

26は灰釉の鉢と思われますが、焼成不良で釉は十分溶けていません。

27、28は灰釉の盤です。釉色は、平茶碗（５、６）とまったく同じです。27は重ね焼きをした際、下の陶器が上の陶器にくっついてしまっています。

これら膳所焼製品の土は、擂鉢がやや粗く、茶入、茶碗はたいへん細かく、他の製品はその中間ぐらいです。８と24の土は、灰色をしているので他の製品と産地が違うかもしれません。

最後に、膳所焼製品が出土する消費地の遺跡について触れておきましょう。膳所焼は信楽焼などに比べて、窯業地としての規模が小さく、製品もそんなに多く生産されなかったこともあり、遺跡の調査報告書での正式な出土の報告はありません。ただ筆者が、実見させてもらった守山市の二町鏡遺跡の出土品の中に膳所焼擂鉢が何点か入っていました。今後、膳所焼製品がどのように流通していったかを研究していくことが必要でしょう。

（稲垣　正宏氏　提供）

（注）

① 河原正彦『近江のやきもの―近世の動向―』（日本やきものの集成[6]近畿Ⅰ）平凡社、1981 ※本文の膳所焼の歴史（概説）については、『近江のやきもの―近世の動向―』を要約して引用させていただきました。

② 『本光国師日記』 寛永６年９月26日に到来品として「せゝやきちゃわん」が記される。

③ 『駿府御分物御道具帳』に「勢田焼壺」

④、⑤、⑥ 河原正彦『近江のやきもの―近世の動向―』による。

⑦ これは、焼手の名の違い（「太郎左衛門」と「惣左衛門」）からも考えられることです。